



月刊「HANAYASURI」2024年2月号（通巻21号）

P2-3 巻頭エッセイ「海とワンダー」相地透

P8 観察会レポート①「冬の観察会 阿久比町植大」神谷久仁香

P10 観察会レポート②「詩と遊ぶ 其の五」相地透

P12-13「子どもが不思議と出会う時（二十一）」森下京子

P17 詩「新しい年には」伊藤康子

表紙／「雪椿」青山映子 Eiko AOYAMA

P4-7 「2024年『はなやすり観察会』年間スケジュール」

P9 「水をめぐる話し 第十回」土山ふみ

P11 「詩人・新美南吉を想う」堀崎倫弘

P14-15「チェイン・オブ・ライフ」相地満 P16 <一枚の絵>「シジュウカラ」岩田郁代

P18-19 日常エッセイ「おいしいみやげ話 13」長谷川芙実子／観察会のお知らせ [2～3月]

## 巻頭エッセイ「海とワンダー」

冬の海に行くのが好きだ。年々、街では冬らしさを感じづらくなっているが、海は寒い。風が冷たく空気の澄んだ日は、海が青く見える。

2023年も終わりに差し掛かった、晴れの日。知多半島の海岸を訪ねた。空気が澄んでいて、浜は明るかった。風は、それほど強くない。波の音が心地よく聞こえてくる。見れば、初夏になると浜を覆う海浜植物はすっかり枯れていて、緑の映える砂浜ではなかった。

ハマゴウの枯れ枝を踏んで海辺へと歩く。打ち上げられた貝殻が帯を作っている。サルボウ、ミドリイガイ、ナミマガシワ。波打ち際では、海水と光が絡み合い、貝殻も小石も砂も輝いている。イタヤガイやナデシコガイが目に残ると、拾いあげる。

巻貝の軸を拾うのも好きである。巻貝の軸は、一見して、かつて巻貝だったことが断面から分かる状態のものよりも、まるで何かの骨であるかのように、ほとんどが削り落された状態のものの方が良い。私は、それを「箸置き」と呼んでいる。呼んでいるだけで、そのように使っていないのだけれど。箸置きは箸が置けるだけでなく、手に持って握り込むと、「ツボ押し」にもなる。ツボを押すには、ちよつと大きめのものがいい。

浜辺に目を落として、ゆつくりと歩いていると、少し先に数羽の海鳥がいた。波に合わせて行ったり来たり、エサをついついでいる。近づくと、大型の一羽を除き鳥達は飛び去った。大型の一羽はカモメだった。カモメは数羽でいるところはよく見かけるのだが、一羽だけであるのを見かけることは、あまりない。ゆつくりと近づいても、急いで距離をとったり、飛んだりしない。チラチラとこちらを見ながら、波打ち際を歩いていく。後ろから付いていくと少し歩調を早めて浜辺に上がり、こちらをじつと見て、しゃがみこんだ。

カモメは幼鳥だった。この近くで生まれたのだろうか。親とはぐれたのだろうか。人に対する警戒心はあまり無いようだった。警戒心がない、というだけのことなのだろうか、その落ち着いた様子を見ると、人との距離が近づくと前に慌てて飛び立つ成鳥よりも、大人に見えた。

年が明けてから、しばらくの間、「センス・オブ・ワンダー」の「ワンダー(wonder)」の意味を考えていた。「センス・オブ・ワンダー」は「自然の不思議に驚嘆する感性」と翻訳される。「ワンダー」は、出会うと楽しいものという印象が、なんとなくある。

その自然の不思議だが、動き始めを予知することは、できない。急に始まる。兆候はあるだろうし、科学的な数値の蓄積と分析で、ある程度の予測は立てられるかもしれないが、予測は予測。自然が動いた後で、結果、こうだったとしか言いようがない。

たとえば、ここ数年我が家では、何匹もの蝶が幼虫からさなぎとなり、羽化している。それなのに、羽化の瞬間に立ち会ったことは、一度もない。大体が、いつの間にか羽化しているのである。さなぎの体が割れて、体が全部抜けるまでは、ごくわずかな時間。天敵に狙われることを考えたら、そう、うかうかしてはいられない。だが、家で暮らしている私にそんな危機感はなく、日々うかうかしてばかりなので、結果、「あっ！もう蝶になってる！」という事になるのである。

話が逸れてしまったが、「ワンダー」とは「驚嘆する感性」であり、人の「感情」ではないということ、あらためて考えた。「ワンダー」は、おそらく、生きとし生けるもの皆兼ね備えている。鳥も、蝶も、猫も、たぶん兼ね備えている。そして「ワンダー」の先に、人が人であるために、もっとも大切な、感情がある。楽しい、嬉しい、寂しい、悲しい。

もし、自然の不思議が引き起こした何かによって、人同士のあらぬ対立が生まれたとしたら、それは「ワンダー」のせいではない。人が兼ね備えている部分、感情の整理に問題があるのだと思う。感情の整理は、十分な大人であっても皆、とても苦労する。

一言で括ることができない感情は、少しずつ時間をかけて、整理したらいと思う。自分の中に芽生えた感情を正しく伝えるため、言葉に置き換え、文にする。人は、言葉という優れた表現手段を用いることができるのだ。表現はコミュニケーションに繋がる。問題は言葉を交わし続けることで、解決していきける。言葉を聞いて、言葉を伝えて、言葉を分かち合っ。すべてはそこから。そこから、未来に向けて、最初の一步が始まる。